「仰しやつたのはこなたはん一人や」
「アノ、名前を仰山書きましたが」
「そうやろ、去年宅のお父ッあんが死んでな、香奠を貰ふたんやが香奠返しをせんならん、何軒あるやろ」
「モシ、うだ〳〵云ひなはんな、帳面が眞黒に成ましたが、さつぱりわやゝ」
番頭はんが下へ降りて仕舞ひました。暫くすると船頭はんが、
「出しますぞー」
と云ふ聲に皆がどや〳〵と下へ降りて來ますと、下では女中さんが辨茶羅を申して居ります。
「へエ何方さんもお靜にどうぞお早ふお上りを、へエ何方さんもお靜に、あの貴郎はん藁鞋を履かいでもよろしゆう御座ります、直ぐに船に乘るのんどすで其所に手前の方の下駄がおす、それを履いてお越し遊ばせ、川端へ脱いで置いて戴きましたら、私の方の燒印が押しておすので後で拾ひに參ります、有難うさんで、お早うお上りを、あんさんのお辨當これに造らへて御座ります、中に高野豆腐が這入つて御座ります、お汁は絞つて御座りますが折角の着物に汚點が付くといきまへんので蕨繩でさげる樣に仕ておす、さげてお越遊ばせ有難うさんで、どうぞお早うお上りを有難うさんで、お靜にお越遊ばせ、オウ、これは船場の旦那さんどすかいな、お見それ申して居りまして誠に失禮

を致しました、マア〳〵坊稚さん大きうおなり遊ばした事わいな、先年お越のときはお乳母さんに抱かれて御座つたのに此樣に大きくお成り遊ばして可愛いおす事わいな、お歸りに成りましたら御寮人さんに宜しう云ふていたゞきます樣に、先程はまた名々にお祝儀をいたゞきまして有難うさんどす、アノ丹波の園部からおもよどんと云ふ女中さんまだ奉公して居られますか、まあ〳〵御忠義なお方わいな、どうぞお歸りに成りましたら寺田屋のきよが宜しう言て呉れと申しましたと云ふていたゞきます樣に、さよーなら——、何方もお靜にお下りや——す……」
「オイ彼奴何んや、大きな口を開きよつたな」
「皆の頭へお靜にを振りかけよつたんや」
「アゝそうか、そんなら、さよーなら——」
「コレお前、何を仕てるねん」
「彼奴がお靜にを振りかけよつたんやさかい、私はさよならをゆすり込んだつたんや」
「そんなしようむない事を仕ないな」
「オーウ、早よ來い〳〵」
「何方もお靜に」
「早よ來い、〳〵」